



**Data**

監督: リドリー・スコット  
 脚本: デヴィッド・スカルパ  
 原作: ジョン・ピアースン『ゲティ家の身代金 世界一嫌われた大富豪の一生』(ハーバークリNZ・ジャパン刊)  
 出演: ミシェル・ウィリアムズ/クリストファー・プラマー/マーク・ウォールバーグ/チャーリー・プラマー/ロマン・デュリス

## 👁️👁️ みどころ

1963年の「吉展ちゃん誘拐殺害事件」の身代金は50万円。『64—ロクヨン—』のそれは2000万円だったが、ゲティ家の身代金は1700万ドル(50億円)。それは、億万長者のゲティにとって、高い?それとも安い?

それも問題だが、それ以上の問題は、ゲティがその支払いを拒否したこと。すると、夫と離婚しゲティ家との縁を切ったゲティ三世の母親はどうすればいいの・・・?

1700万ドルから290万ドルへの減額や、それを経費処理するというオチ(?)を含めて、その展開はスリリングで面白い。結果オーライは喜ばしいが、本作に見る人間模様から、人間の喜劇性と悲劇性をしっかり学びたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■これも実話! 身代金1700万ドルは高い?安い?■□■

日本では1963年に起きた「吉展ちゃん誘拐殺害事件」の身代金は50万円。瀬々敬久監督の『64—ロクヨン— 前編』『64—ロクヨン— 後編』(17年) (『シネマ38』10頁・17頁)の冒頭に登場する、昭和64年1月5日に発生した「翔子ちゃん誘拐事件」でスーツケースに詰め込まれた現金は2000万円だった。また、去る5月26日付朝日新聞の「私の好きな黒澤映画」で第8位に入った誘拐サスペンス『天国と地獄』(63年)は、疾走する電車内での緊迫した身代金受け渡しを撮影するため車両を借り切ったそうだが、その身代金は3000万円だった。

それに対して、フォーチュン誌によって世界初の億万長者に認定されたジャン・ポール・ゲティ(クリストファー・プラマー)の孫であるジャン・ポール・ゲティ三世(チャーリー

ー・ブラマー)が誘拐された事件で、チンクアンタ(ロマン・デュリス)たち犯人側が電話で要求してきた金額は1700万ドル(当時のレート換算で約50億円)。しかし、総資産は約5億ドル(1400億円)とも言われていたゲティにとって、1700万ドルという身代金は高い?それとも安い?

## ■□■身代金の支払いを断固拒否!ゲティの対応は?■□■

身代金目的の誘拐事件は悪質だから、「近親者その他略取され又は誘拐された者の安否を憂慮する者の憂慮に乗じてその財物を交付させる目的で、人を略取し、又は誘拐した者は、無期又は三年以上の懲役に処する。」とされ(刑法第225条の2身の代金目的略取等)、その法定刑は非常に重い。他方、『64—ロクヨン—』でも『天国と地獄』でも被害者側は「命には代えられない」と考え、身代金を何とか工面するのが普通。つまり、誘拐された者を取り戻すことだけが唯一の目的となり、お金なんか犯人にくれてやっても仕方ない、ただ願うのは誘拐された者の命・安全だけ。ところが、何とゲティは記者団の質問に対して「一銭も払わない」と答え、その理由として「私には14人の孫がおり、一度支払えば14人の孫全員が誘拐されることになる」と説明したから、ビックリ!がぜん、この事件は世間の注目を浴びることに。

他方、誘拐されたゲティ三世の母親、ゲイル・ハリス(ミシェル・ウィリアムズ)は、ゲティの息子(アンドリュー・バカン)と結婚しながら、離婚の際には一切の慰謝料、財産分与、子供の養育費を放棄する見返りに、子供の養育権と監護権を獲得してゲティ家と縁を切った女性。そのため、ゲイルには何の資産もなかったから、1700万ドルの支払いとは不可能だった。チンクアンタは「父親から借りて支払え」と要求したが、今更そんなことをゲティに頼めるの?また、頼んでも、拒否されるのでは?そう予想していたが、案の上……。すると、誘拐されたゲティ三世の身の安否は……?

ちなみに、身代金の支払いを断固拒否したゲティは決して事態を放置したわけではなく、彼独自の対応として、自分の下で働いている元CIAの有能な男フレッチャー・チェイス(マーク・ウォールバーグ)に犯人グループとの「交渉」を命じた。しかし、そこでの問題は、その「交渉」とは一体ナニ?ということ。つまり、犯人の逮捕に重点があるの?それとも、金額をまけてもらうことに重点があるの?ということだ。それは、ゲティ三世の身の安全をどこまで優先させるかの問題とイコールだが、本作ではその点の指示があまりにあいまいすぎる。そのため、チェイスはゲティの意思を「付度」せざるをえなくなったが、何せゲティはわがままだから、いくら有能なチェイスでも、この先苦勞するのでは?そう思っていると、ラストに向けては、案の定……。

## ■□■ゲイルの交渉相手は誘拐犯の他にも!それは誰?■□■

本作でゲイル・ハリス役を演じたミシェル・ウィリアムズは、『マリリン 7日間の恋』

(11年)『シネマ28』33頁)、『マンチェスター・バイ・ザ・シー』(16年)『シネマ40』15頁)等で過去4度のアカデミー賞にノミネートされている、ハリウッドを代表する名女優。そんなゲイルが結婚した当時の夫は多分まともだったのだろうが、順調にゲティ家の当主とゲティの事業の後継者になるのは至難のワザ。そのため彼はドラッグに溺れ、夫婦関係も破綻したわけだが、若くして財産を築いたその父親のゲティも若い女を好んで5度も結婚し、1973年の本件誘拐事件当時14人の孫を持っていたそうだ。すると、ゲティの子供はゲイルの夫の他、How many?

ちなみに、2018年5月の日経新聞「私の履歴書」に連載されているのは、リップーグループ創業者のモフタル・リアディだが、華人企業家として大成功した彼には6人の子供、22人の孫、56人のひ孫がいたらしい。その5月28日版では「華人企業では後継を巡る家族の対立から経営が傾くケースも散見される」ところ、彼は「対立を防ぐには家族間の交流が必要だ」と自慢めいた記述をしている。たしかに彼の結婚や家族観そして家族愛に比べると、ゲティは大違いだ。パンフレットにある永野寿彦(シネマ・イラストライター)の「ジャン・ポール・ゲティの意外な人生」や香山リカ(精神科医/立教大学現代心理学部映像身体学科教授)の「身代金を払うことで、ゲティが向き合えなければいけないもの」によれば、ゲティは自分がローマ帝国のハドリアヌス帝の生まれ変わり信じるとくらいに美術品、とりわけ大理石で作られた古代ギリシャ・ローマの彫像を好んで収集していたらしいから、かなりの変わり者。

本作では、誘拐犯との交渉中であるにもかかわらず、美術品を買い漁る(買い叩く?)ゲティの姿が描かれる。誘拐事件については「狂言かも?」「支払えば他の孫も標的にされる」等の独自の哲学(?)によって、身代金を一銭も支払わないと宣言したから、ゲイルは誘拐犯と交渉する前にこのゲティと交渉せざるをえないことに。さて、ゲイルは犯人との交渉の前段階の交渉として、ゲティからの身代金の借入(?)に成功するの?それとも・・・?もし、それに失敗すれば・・・?

## ■犯人たちの狙いは?その結末は?知能レベルは?■

同じ財産犯でも、窃盗罪に比べて詐欺罪や横領罪は知能犯的色彩が強い。それと同じように、同じ誘拐罪でも、身代金目的のそれは知能犯的色彩が強いから、ターゲットを誘拐する行為よりも、その後の「近親者その他略取され又は誘拐された者の安否を憂慮する者の憂慮に乗じて」「その財物を交付させる」行為の方がはるかに難しい。そこでのスリリングな展開が大きな興味を集めるため、『天国と地獄』や『64—ロクヨン—』では、その心理戦と実践交渉のあり方が興味深く描かれたわけだ。そして、本作でもそれは同じだ。

チンクアンタをリーダーとする誘拐犯グループの狙いはもちろん1700万ドルのカネだが、犯人たちの結束力はどうもイマイチ。しかも、鍵のかかった部屋に閉じ込めたゲティ三世の世話をする犯人は、顔を見られないよう(記憶されないよう)に目出し帽を被っ

ているのだが、ある時それを忘れてしまうという単純なへまをやらかしてしまうから、その知能レベルはかなり低そうだ。また、この誘拐事件の発生は1973年だから、チンクアンタからゲイルへの連絡は専ら電話。したがって、それが録音され、警察も一緒に聞いていることは想定内のはずだから、早く金の受け渡しを完了させる必要がある。ところが、ゲイルは現実にカネを持っておらず、犯人とその金額や受け渡しの交渉をする前に、まずゲティからカネを借りる交渉をしなければならないから、大変。しかし、チンクアンタたちがそれを「時間稼ぎ」と考え、いつまでにカネを準備しなければゲティ三世の指を切り落とす、耳を切り落とす等と脅したのは当然だ。

本作のパンプレットには、永野寿彦の「ABOUT THE CASE ジャン・ポール・ゲティ三世誘拐事件の真実」があり、その「ンドランゲタと誘拐ビジネス」の項目には「ポール三世を誘拐した組織『ンドランゲタ』は、イタリア南部カラブリア州のマフィア」「70年代はじめにはまだ誘拐は犯罪ビジネスにはなっていなかったが、シシリア・マフィアがドラッグカルテルの資金入手のために始め、他の組織も追随するように。ンドランゲタもそのうちのひとつで、200年前くらいから農家相手にみかじめ料を取って稼いでいた貧しい地域を拠点としたファミリーだ」とある。更に続いて「実際にポール三世を誘拐したのはンドランゲタとわずかに関係のある小さな犯罪グループでしかなかったが、大富豪ゲティが支払いを拒否したために、後にポール三世をンドランゲタの上位組織に売り渡すことになってしまった」とある。誘拐事件を描いた映画では交渉の風景が最大のポイントになるが、本作を観ていると、その点の緊迫感がイマイチ不足している。それはひとえにチンクアンタたち犯人グループの知能の低さによるものだ。そのため、結局チンクアンタたちはゲイルやゲティとの交渉を投げ出し、ゲティ三世をンドランゲタの上位組織に売り渡してしまったようだ。これは今でいう不良債権を上位の取立て機関に債権譲渡したようなものだ。本作後半からはゲティ三世の耳の切り落としとその送り付けという悲惨な事態を迎えた後に、やっと一定の身代金を支払うことを決意したゲティが、ゲイルの代理人として指名したチェイスによる金額の交渉になっていく。さあ、その展開と金額の決定は？

## ■□■ゲティは実業家？どケチ？いやいや合理主義者！■□■

本作は『天国と地獄』や『64—ロクヨン—』と同じように、誘拐事件に伴う交渉のスリリングな展開を楽しむ(?)他、「ゲティは実業家？それともどケチ？いやいや合理主義者！」という面白い論点があるので、本作中盤ではそれをしっかり考えたい。ゲティが中東の石油ビジネスで大成功を収めた実業家であることは間違いないが、その服やネクタイ、靴などを含めて、彼がケチだったことは間違いないらしい。すると、彼は「どケチ教」の教祖と言われている元大阪マルビル会長の吉本晴彦氏と同じようなどケチ？いやいや、決してそうではない。誘拐犯からの1700万ドルの身代金の支払いを断固拒否した理由を含めて、彼は吉本氏と同じように「どケチ」を装った合理主義者と考えるべきだろう。

そのことは、彼の美術品収集が趣味の域を超えて資産形成や財産承継、そしてまた税金対策のための合法的・合理的な手段として使われていたことから明らかだ。本作では孫の誘拐事件発生という緊急事態の中、一方ではチェイスに命じて犯人の逮捕と交渉に当たらせると共に、他方では悠然と美術品の収集を続けるゲティの姿が描かれる。そこに見る値切り交渉がお見事なら、かつてゲイルが幼いゲティ三世を連れてゲティの家に遊びに来たとき、すごく高価な美術品だと誤解させて(?)小さな置物をプレゼントしたのもすごいテクニック。美術品や骨とう品の世界で儲けていくためには、中井貴一と佐々木蔵之介が共演した『嘘八百』(17年)で見た程度の「騙しのテクニック」は不可欠だ。ゲティが集めた美術品の大半は、ゲティの死後「J・ポール・ゲティ美術館」に収められて、ゲティ財団によって運営され、ロサンゼルス観光名所になっているというから、スゴイ。後述する身代金の「値切り」や、それを「経費処理」したことを含めて、まさにゲティは徹底した合理主義だ。

本作のチラシには、「お蔵入りの危機から史上空前の大逆転劇!!」の見出しが躍っている。それは、全米公開1ヶ月前の2017年11月、ゲティ役ケヴィン・スペイシーが突如降板したにもかかわらず、御年80歳の巨匠リドリー・スコットは即座に再撮影を決断し、数日後にはアカデミー賞俳優C・ブラマーの出演を決め、3週間後には再び映画を完成させたためだ。「ひょうたんから駒」のような緊急出演、しかもわずか9日間だけの追加撮影でアカデミー賞助演男優賞ノミネートは、彼にとってもおいしい話。88歳のベテラン俳優・クリストファー・ブラマーの奮闘に拍手!

## ■身代金は290万ドルに減額!しかも非課税枠で!■

本作はゲティ三世の耳が切り落とされたり、「すわ、ゲティ三世の死体発見か!」と騒がれたり、現実にはチョー悲惨な事件だが、ラストには犯人たちは一斉検挙され、ゲティ三世も無事ゲイルの元へ戻ってくるから、結果オーライ。また、身代金が債権譲渡されて交渉相手が代わっていく中で、その金額も1700万ドルから最終的に290万ドルまで減額されていくから、何となくユーモラスな面も・・・。

そこで私が驚いたのは、ゲティがゲイルと離婚した夫のポール二世を呼び、犯人へ支払う身代金の一部をゲイルに貸し付ける代わりに、ゲイルにゲティ三世の親権を放棄させる約束をさせること。前述した「ABOUT THE CASE ジャン・ポール・ゲティ三世誘拐事件の真実」によると、この約束をさせることによって、ゲイルは犯人へ現実的に290万ドルを支払ったものの、実際に出したのは非課税枠になる最大限度の220万ドルのみで、残りの70万ドルはポール二世に4パーセントの利子で貸し付けたい。これによって、290万ドルはすべて経費処理することができたそうだから、その手腕(テクニック?)にびっくり。しかし、いくら14人もいるとはいえ、血を分けた孫を誘拐犯から取り戻すための身代金を、こんなふうに会社の経費として処理していいの?何よりも、その精神構造

のあり方にビックリだ。

2018（平成30）年6月1日記